

## 根無し草、回り道の人生 社会に受け入れてもらえる人材になれるのか？

岡本浩介<sup>†</sup>（岡本動物病院院長）

私は、神奈川県逗子市で生まれたが、そもそもは京都で「〇〇屋〇〇衛門」の屋号を持つ食材を扱う問屋を生業としていた家系であった。曾祖父の代に東京に移り住み、祖父は軍医として奉職しながら赤坂で開業医をしていた。一方、母親は、近隣が親族ばかりの典型的な田園風景を残した信州の出身で、私は幼い頃から休みとなれば信州の山野を駆け回り、田畑を手伝い、近くにあった家畜市場を眺めたりしていた。小学生の時、横浜での団地住まいを経験したのち、大学に通う頃、両親は葉山に居を移した。卒業を期に相模原の下宿から実家に戻るが、周囲に知人はなく、地域コミュニティーを感じる事ができない環境に違和感を覚え、「自分は根無し草なのだ？」と思い始めた。地域社会の中で自分の存在意義を見つけ出すことはできず「社会のために少し何かできないか？」と考えたのは、この頃だったのかもしれない。

大学職員だった父は、「子供には資格を持って生きて欲しい」との思いから、幼い頃より生き物好きだった私に獣医師の道を薦めた。私自身も漠然と獣医師になりたいと考えようになったが、蝶の採集に明け暮れた末に獣医学科の受験に失敗した。辛うじて畜産学科に進学し、卒業と同時に獣医学科の編入試験を受験した。幸いにも学士入学することはできたが、これが最初の回り道で、獣医師免許を取得するまで9年の時を要した。

社会人としての第一歩は、横浜市内の動物病院で3年間勤務した。顧客（飼い主さん）に納得いただくことの難しさや金銭を得ることの大変さ、仕事に対する責任感を身にしみて思い知らされたが、個人の努力が評価に直結する診療業務は、一生懸命に仕事へ取り組むことの楽しさを感じることができた。反面、「国家資格者として社会のために何ができるのか？」「獣医師以外の世間に触れた方が良いのではないか？」との疑問を持ち始めたのもこの頃であった。当時の小動物開業獣医師は、勤務医を長期雇用できる環境には至っておらず、また、開業資金を貯蓄するにも勤務医を続けることは困難であると判断し、民間会社への就職を決意して人材バンクに登

録した。

紹介された第二の職場は、生物資料の分析機器を販売する Beckman 株式会社（現 Beckman Coulter 株式会社）の医用システム事業部で、蛋白系測定システムの販売促進を担当した。外資系会社は「個人主義・能力主義」というイメージを持って入社したが、異なる才能を持った人材が揃っており、個々がお互いを尊重し、能力を補完し合うことで良い人間関係が構築されていくことを学ぶことができた。良好な人間関係で業務にあたれば、それが良い成果に結びつくことも実感させられた。人の能力には多面性があり、自分は井の中の蛙であることを痛感した次第である。そのような人間関係の中で、上司や同僚から「人生は一度だから自分の道（獣医師）を歩みなさい」とのアドバイスを再三いただき、再び獣医業界に戻る決意をした。

第三の職場は、長野県の家畜保健衛生所だった。防疫課に所属して検査業務や養豚衛生、放牧衛生を担当した。3年目からは、農家指導を行う環境指導課に異動し、超音波画像診断装置を用いた牛の妊娠診断や受精卵移植業務に従事した。農家の収益に直結する豚の衛生対策や超音波診断装置による妊娠診断は、農業共済組合や農業協同組合の家畜診療所の獣医師と連携を取りながら業務

### 岡本浩介

#### 一略歴一

- 1987年 麻布大学卒業
- 同 年 保田動物病院（神奈川県横浜市）勤務
- 1990年 Beckman（株）勤務
- 1992年 長野県佐久家畜保健衛生所勤務
- 1997年 岡本動物病院開業  
現在に至る
- 2005年 神奈川県獣医師会小動物学術部会員
- 2011年 同小動物学術部会長
- 2014年 同学術大会実行委員長



<sup>†</sup> 連絡責任者：岡本浩介（岡本動物病院）

にあたり、一定の成果を出すことができたと感じている。豚の慢性呼吸器病をコントロールするために数枚のベニヤ板の間仕切りが劇的な効果を生んだこと、電気が通っていない放牧場や谷間の牛舎で超音波診断装置を使うため職場の片隅で発電機のキャプテラーの修理をして妊娠診断を行ったりしたが、その時の畜主さん達のうれしそうな顔は、今でも懐かしい思い出である。

当時は、観光を取り入れた牧場経営や牛乳の直販、付加価値を高めるためチーズ等の乳製品の製造が軌道に乗り始めた時代であったが、同時に戦後開拓や被差別の問題など負の部分も身近に感じた。好き勝手に歩いてきた人生であったが、県職員4年目の平成7年に結婚したことにより自身以外への責任を初めて感じる立場となった。また、父親が定年退職となったこともあり、再度、自分の人生を見つめ直すこととなった。

悩み彷徨った生き方であったが、神奈川に戻る決意を固めて平成9年に茅ヶ崎市に動物病院を開業した。「嘘のない正直な診療を飼い主のために」を自身に言い聞かせながら日々の診療を行っている毎日である。

現在、所属する神奈川県獣医師会では、小動物学術部に所属して10年目となり、平成23年度からは部会長を拝命し、昨年度より学術大会実行委員長を兼務している。部会長を拝命するにあたり「学術を充実し会員の診療技術の高位平準化を目指すこと」、「会員同士の親睦をはかり、和を持って地域獣医療の信頼を得ること」、「職域の異なる獣医師の地位向上について考えること」を自身に与えられた責務と受け止め、日々の業務にあたっている。

55歳となった。人生の持ち時間はもうそんなに多い

わけではないのかもしれない。勤務医、外資系会社、公務員、開業と回り道をしながら、その場、その時で自身の顔を変えてきたが、どのような立場の時も「この仕事は満足できるのか?」、「自分自身は楽しいのか?」と獣医師としての自分に向き合ってきた。一方、社会人としては「社会の課題は何か?」、「自分の役割は何か?」、「どのように取り組めば良いのか?」とも考えてきた。自分がやりたいことと周囲が自分に望むことは違うものだと実感しているが、自分から居場所を求めることによって人は居場所を与えてくれるものであると思う。その職責を全うすることで社会人としての成長につながると考え、重要な仕事を与えていただいている周囲の方々に感謝しながら日々精進している(…と言うと聞こえは良いが、その実は未熟で申し訳ない限りである)。

自分の周りには、いつの時代も良い恩師と良い仲間がいた。「若い人達にとって、私も先人と同じような存在になれるのか?」自分が素晴らしいと感じた人達のようになれば、自分も社会に必要な人材になった証ではないだろうか? そのことは一朝一夕でできることではないし、自身が理想的な人物像になることを望んでいるわけでもない。ただ、「同じような考えを持つ仲間が少しずつ増えれば、人生をお互いが楽しく過ごせるのではないか?」と考えている。微力であるが、もう少しだけ獣医師会のために頑張りたいと思っている。

最後に、日本獣医師会雑誌にこのような文章を書かせていただくにあたり、ご推薦をいただいた神奈川県獣医師会の先生方、ならびに一緒に仕事をさせていただいた長野県獣医師会の先生方にこの場をお借りしてお礼申し上げます。